

保育者養成の今日的課題 (6)

～ 少子化傾向を中心として～ 動物実験の試み

前田 あけみ

一、はじめに

少子化がもたらすであろう課題は、様々であるが、特に危惧されることは、多様な関係体験がなされにくくなること、自己中心的なあり方から、自己を相対化し、同時に様々な存在をかけたがないものとして捉えることの体験が少なくなることであろう。このような体験は、その関係の作り方の本質を捉えていくならば、様々な活動によって、充分体験されうると考えられる。その可能性の一つとして、動物との多様な関係体験があると、筆者は考えている。

当初この実習は、純粹に動物に関する知識や技術を深め、また、子どもが動物とかわる際の援助者になれるようにと行うことを目的にして、保育内容総論の特別演習として行った。ところが、へびに触れるなどの体験は、その子測を越えて、自分の中の偏見に気付いたり、また、動物を抱くためには、その動物の性質を知り、それに応じて抱かなくてはならず学生に相手のあり方に応じてかわる「補助自我的な振る舞い」を育てることとなった。さらに、様々な動物の人間とは異なる形態や性質に触れ、人間も動物の一種類であると言うことを改め

て発見している。この動物実習が、単なる知識や技術の獲得だけでなく、多様な関係体験をもたらし、自分（人間）と言う存在を、客観化・相対化する体験をもたらすことがわかって来た。

そこで、このような実習を保育者養成に取り入れることは、保育者としての資質を高めるのに役立つのではないかと考え始めている。しかしながら、今の段階は、まだ模索の段階であり、あくまでも途中経過である。（けれども、実感として学生に大きな変化をもたらしたと感ぜられるし、学生自身も多くは、「動物実習が印象的であった。機会があったら、もう一度行きたい」と述べている）

二、動物実習の概要

保育内容総論の特別演習として、月に一度の割りに土曜日の午前中に三回行った。

対象となったのは、富山大学教育学部幼稚園教員養成課程二十六名の学生（全員女子）。一回めは、富山市ファミリーパークで、学生が、三人の飼育係から、動物の扱い方（かかわり方）を学び、実際に抱いてみた。二回

めは、ファミリーパークで、市内の保育所の子ども達三十名に、今度は、学生が先回の飼育係の役を取り、動物との出会い、触れ合いの活動を指導した。三回めは、富山大学で、実習についてのディスカッションを行った。

富山市ファミリーパークは、富山市郊外の呉羽丘陵西部に位置する。ゾウやパンダなどの珍獣はいないが、ファミリーパーク内の子ども動物園では、いつでもアヒルやヒヨコを抱くことができる。このような施設の協力で、この動物実習は、実現している。

この実習に関しての養成人としてのねらいは、①動物に対する理解や親しみを深め、飼育に関する知識・技能を高めること。動物一般に対しては、動物の存在を認め、それなりの付き合い方の有ることの原体験をする。特定の動物に対しては、具体的な知識・技能を身につける。②子どもと動物のかかわりを促進する媒介者としての、保育実践力を高める、である。しかし先にも述べたように、そのねらいを越えて、多様な関係体験、偏見などの価値観について発見したり、考えたり、人間（自己存在）を相対化して捉えるなどの豊かな体験が成立している。

ファミリーパーク側のねらいとしては、①将来の保育者に対する動物についての知識・取り扱いなどの普及
②子どもと動物のかかわりを見学し・体験し、動物の持つ価値を改めて考える場を提供する。③「心豊かな子ども達を育てる」ことを目的にした機関は、少なくない。家庭・学校・地域など、子どものあらゆる日常生活でのその目的が達せられるには、諸機関のネットワーク化が有効であろうが、まだ実例は少ない。今回は、その一つの試みとして、学校教育機関との共同研究を行うと言うものである。

三、実習の実際

実習の実際について、特に一回めを中心に述べる。

一回め、一九九〇年五月二十六日土曜、九時から十二時までパーク内の子ども動物園で、動物について、簡単な特性や抱き方の説明を、飼育係から受け、その後実際に抱いたり、触れたりし、さらに子どもが、抱く際の援助についても、具体的なアドバイスを受ける。

例えば、抱き方のポイントとしては、

ウサギは、尻のところを当て、人間の胸とウサギ

の胸とが、向き合うようにし、足は人間の胸につくようにすると安定できる。子どもには「ウサギさんのお中と、ぼくのお中がくっつくようにね」というように言って援助するとよい。

ヒヨコは、両手でそつとすくうように、手のひらの中に入れる。抱き終わって地面に戻す時は、地面に両手を近づけて、静かに両手を開く。立ったまま、両手をぱつと開くと、ヒヨコは落下して、足を怪我したりすることがある。一mぐらいの高さでも、体長一〇cmのヒヨコには、十倍の高さであり、目も眩むくらいである。子どもには、「お水をすくうようにね」となるべく座って、抱くようにと指導するとよい。

アヒルはおつとりしているように見えるが、意外に逃げ足が早い。アヒルの後ろの方から胴の部分をさつと両手で抱え、首を軽く押さえて胸に抱く。人間がもたもたしていると、アヒルは襲われると思つて羽根を、バタバタさせる。バタバタさせて動いている時には、抱けず、羽根が体についている時に、すばやく抱く。子どもには、保育者が捕まえて抱いてから、触らせたり、抱かせたりする。

このように、動物を抱くという体験は、相手の特性に
応じて、こちらのふるまい方を変えるという体験、自分
本位では、決して成功しない体験が成立する活動であ
る。

この実習で触れるように用意された動物は、アヒル・
ウサギ・ヤギ・ポニー・ヒツジ・ハツカネズミ・モル
モット・ハムスター・チャボ・ガチョウ・セキセイイン
コ・ウズラ・カメ・ヘビ・カエル・オタマジャクシ・キ
ンギョ・ドジョウ・サワガニ。

この一回めの、最も象徴的な出来事は、「ヘビを抱
く」ということであった。このことは、初めは、筆者の
個人的な興味から始まった。飼育係の山本氏が「ヘビ
は、ヌルヌルしておらず、サラッとしている。アオダイ
ショウは、とてもおとなしくてかわい。ヘビに対し
て、みんな知らないで、偏見を持っている。ヘビの方が
迷惑している」と言われ、「どうです、持ってみません
か。」としかけられたのが、きっかけである。筆者は、
ヘビなど、それまでは、見ると吐き気さえ感じていた。
ところが、それは偏見と言われ、日頃から、自分の内な
る偏見を乗り越えることをモットーとして生きてきたの

で、ヘビにも挑戦することとする。学生達も「前田先生
が触ったら、触る」と言うので、引くに引けなくなった
ところがある。当日、いよいよ最後にヘビに触れる活動
になると、心臓は高鳴り、飼育係に体長一・三mのアオ
ダイショウが手渡されて、ヘビが筆者の腕にからみつい
て来た時は、もうすぐさま放してしまいたい衝動にから
れた。目をつぶって耐えている。ヘビはゆっくり緩やかに
動き、ひんやりとしてさらさらした感触が感じられた。
そして、そっと目を開けると、グレイがかったモザイ模
様のうろこが美しかった。ヘビは、心地よく動いてい
る。「サラッとして気持ちいいし、とても綺麗」と言葉
を発すると初めは遠のいていた学生も寄って来る。一番
初めは、過去に持ったことのある学生が抱き、そのヘビ
に他の学生が見たり、触れたりし、そのうちに自分も
持ってみるといふ学生が次々に現れる。そして、次々に
抱かないまでも、撫でたり、指で触れたりして、最後に
は一名を除いて、殆ど学生が何らかの形で触れている。
触れた印象としては、学生F「絶対に触れないと思っ
ていたのに、実際すつと触れて、後にぬめりがなく、そん
なに怖くはなかった」学生Y「意外なことに触ってみる

と、サラッとしていて冷たく、思ったほど気持ち悪いものではなかった」学生O「へびを触って、握ってみると、動いたびに、体の筋肉が動くのを感じて気持ち悪かったが、へびもやはり生きているんだと感じた」学生A「初めて触った。とても、感激した。でも一人だったら、きつと触れていないと思う」などと述べている。

事後アンケートの中の「一番印象に残った動物は、何ですか」と言う問いに対し、へびが二十六名中十六名、ポニー二名、ハツカネズミ一名、ウサギ一名、ヤギ四名、無回答二名となっている。また、「あなたにとって、今日の一番の収穫は、何だったでしょうか。自由に述べて下さい」という問いに対して、ある学生Mは、次のように述べている。「楽しく動物と触れ合うことができたこと。動物を近くに感じられるようになりました。正直なところ動物は苦手な方で、こんなに触られるとは思っていませんでした。今日の実習は、私にとっては、大変化をおこした実のあるものだったと思います。へびなどの動物に対する偏見が多かったことが、改めてわかりました。動物は何も悪くないのに、怖いものだと決めつけてかかっていたのです。動物に対する接し方

も、抱き方などがわかれば、動物だっておとなしくしているし、怖くないのです。動物だって人間と同じ生き物で不安な時も、機嫌が悪い時もあるということもわかってあげなければ（動物の立場に立って考えなければ）動物とうまくつきあっていけないと思いました。」学生Dは、「実際に触れてみるのが、いかに大切なことなのか、よくわかった。私にとって、ほとんどが、初めて触れる動物だったのだが、『触らず嫌い』という部分があったかもしれない。動物に触れることによって、その動物を身近に感ずることができ、また他に動物にもそれぞれ実際の温かさや呼吸や動き、リズムなどを感じとることができるということに意味があるのではないかと思います」と述べている。

二回めは、六月二十六日、富山市内の保育所の幼児三十名をファミリーパークに招き、今度は学生が飼育係のように、幼児が動物とかかわり合う援助をしたり、保育者（学生）と子どもとのかかわりを観察したりする。対象となった動物は、Aコーナー…アヒル、ガチョウ、Bコーナー…ウサギ、モルモット、ヒヨコ、ハムスター、Cコーナー…子ヤギ

この実習に先立ち、筆者が出した指示は、次のようなものである。①これらの動物との触れ合いを約二十分。なるべく多くの動物と触れ合うように働きかけるが、あくまでも子どもの主体性を尊重すること。学生は二人ペアで、実習と観察を前半グループ二十分と後半のグループ二十分で交代すること。②事前にそれぞれの動物を子どもが、抱いたり触れたりできるように、学生は自ら抱いて子どもに渡せるように、ペアで練習すること。(学生は、アヒルを抱くの苦労したようである)

③子どもが、興味をもったならば、適切な発見ができるようなら、事前に学生が動物の特色などをペアでまとめしておくこと。

実際の実習は、ウサギを見ると一目散にかけていく子ども、近づきたいけれどしりごみする子、持っている餌をヤギが食べに来たり、手をなめられたりして、びっくりしたり、怖がって泣き出したりする子など様々であった。また、ウォーミングアップの活動を三十分くらいだったが、初対面で、動物より、人との出会いに課題が成立してしまい、今後の検討事項として残っている。

三回めは、七月二十一日 富山大学教育学部第一講義

室において、ファミリーパークの飼育係三人を招いて、ディスカッション。初めに二回の実習で発見したり、学んだことを中心に、全員が三分間スピーチをする。そのあと質疑応答を含めて、フリーディスカッションをする。

ディスカッションのテープ起こしの資料より。学生S「(実習前で) 子ども達と生に接したのは、初めてみたいなものなのですけれど、まず思ったのは、子どもと私達みたいな大人では、大ききの認識というのがものすごく違うんだなと思いました。私達は、例えば、子ヤギとかアヒルとか見て、かわいいと思うけど、子ヤギとかアヒルとかは考えてみると、子どもとほとんど同じ大きさで、近づいて来たら後ずさりして逃げる子がいて、私達が、どんなに可愛いと思っても、子どもにとっては、怖いものもあるのだなと思いました。初めて会った大人達と動物園をぞろぞろ動くという特異な環境で、子ども達にとっても、迷惑かなという引け目があって、積極的にあまり働きかけられなくて、その点が反省点です。私自身は、この実習でどう変わったかと言うことについては、私も最初、ヘビが気持ち悪いとか、これは、絶対に触れないと思っていたのですが、実際に行ったら触られ

いだろうか。そして、そのような体験が子どもにおいて成立するためには、保育者自身においてもそのような体験が成立することが不可欠であろう。今回の動物実習は、その体験の成立する実習として位置づけられる。

五、結びに代えて

少子化の問題は、さまざまな生活や体験に変化を及ぼすであろう。しかし、基本的な関係体験が、大切に展開されるように配慮されるならば、つまり、質の配慮によって、数のもたらず課題は、ある程度は解決するのではないだろうか。すなわち、子どもも保育者もそれぞれが、かけがえのない人として、動植物、自然物、文化財などとかかわりあいながら生きている。このようにかわりあって生きることが体験され、そのことが喜びとして育つ。そして子どもにおいても、保育者においても、その喜びから、かかわりあっている自己に気付き、自らがどのようなにかかわってふるまうことで、喜びが育つかかわり、物とかかわりあって、変化し、発展する経験を通して、変化し発展する契機を、自らつくり出していけ

る人として育つのである。このような事柄が、大切にされ、関係発展を見通した保育者のかかわりがあれば、少子化の状況にあって、子どもはむしろ質の高い経験を積むことさえ可能になるであろう。そして、保育者養成にかかわる筆者には、そのことが可能となる「子どもが自己や人や物とかかわり合いながら自己形成する子どもの発達に関する理解」を深め、一方で「関係発展を担う者として子どもの発達を促すかわり方となる視点（理論）と実践力」の養成が求められており、これまで述べてきた、チーム観察法、心理劇法、動物実習は、筆者なりの一つの模索である。

協力 富山市ファミリーパーク（山本茂行、大坪洋美、
石原祐司）

（富山大学教育学部）